

「日本語クラスビジター」を活用したアクティビティ —教育的効果と実施上の問題点について—

末 田 美香子

1. はじめに

専修大学国際交流センターでは、協定校による交換留学生を主な対象として、年3期、短期集中の日本語教育を行っている。本コースにおいては、日本における学習環境の利点を活かし、4技能をバランスよく向上させることを目標としている。その一環として、実際使用の場面におけるインターアクション能力¹の向上を図ることを目的とし、教室に教師以外の参加者を参加させながら、学習者の日本語レベルやニーズに合わせた多様なアクティビティを実践している。

本稿では、本コースにおける「日本語クラスビジター」を活用したアクティビティの内容を報告し、教育的効果、及び実施上の問題点とその改善策について、本コースの担当教師と学習者により得られたコメントをもとに考察する。

2. 「日本語クラスビジター」の性質と利点

近年、日本語教育においては、ビジターセッション²、プロジェクトワーク³等、教室に教師以外の日本人参加者を活用した様々なアクティビティが行われており、その利点として、学習の動機づけの向上、日本社会・文化の多様性の

1 ネウストブニー（2002）による。「文法能力」「文法外コミュニケーション能力」「社会文化能力」から形成される能力である。

2 ネウストブニー（1991）による。実際使用の場面の提供を目的とした「実際使用のアクティビティ」の一つ。「実際使用のアクティビティ」とは「学習者に意義のあると思われるような目的があり、その目的達成のためにインターアクション能力を総合的に使用する活動」である。

3 バルダン田中他（1988）による「学習者が自分たちで話し合って計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集め等の作業を行い、作業の結果をもちよって一つの制作品（報告書、発表、ビデオ等）にまとめる学習活動」

提示、双方向の学習等が報告されている⁴。

学習の段階で、教師以外の参加者を活用し、日本語の実際使用の機会を提供することによって、学習者は接触場面⁵における日本語使用の実態を観察し、自分自身の日本語習得の状況を意識化することができる。教師は学習者の日本語使用の実態を観察することができ、その後の指導に活かすことができる。以上のように、教室における学習の段階で教師以外の参加者を活用する利点は多い。

このようなアクティビティにおける日本人参加者の役割は、アクティビティの目的と内容によって、それぞれ異なる。その一形態として、ネウストブニー（1995 a）では、日本語のティーチングアシスタント（以下JTAと記す）について述べている。JTAは、「普通は日本語の母語話者で、教育訓練経験はゼロかほとんどないような授業の参加者であり、資格をもった先生にとって代わるのではなく補助的な役割を果たす参加者だといえる。」と定義されている。また、「彼らは教師ではなく、授業参観者でもなく、単なる友人でもない。（中略）彼らが活動するのは、十分な資格のある教師によって計画されかつ指導されている既存のコースに組み込まれる特殊なアクティビティーにおいてである。」と述べ、JTAの独自性を活かしたアクティビティの計画の重要性を強調している。更に、JTAの活用により、単なる演習やシミュレーション活動にとどまらない「本物の場面」を経験し、社会言語的かつ社会文化的規則と接触させることの重要性も指摘している。

現在、本コースにおいては、上記のネウストブニーによるJTAの定義に従い、学内の日本人学生を中心に「日本語クラスビジター」（以下「ビジター」と記す）を募集し、積極的に活用している。教師とは異なる「ビジター」の性質と期待される利点は次のようなことである。

- 1) 「ビジター」は教師とは異なる1対1の同等の関係を保ちやすく、初対面であっても緊張感や距離の生じにくい比較的にリラックスした関係を築きや

4 トムソン木下・舛見蘇（1999）、高偉・長坂（2000）、高橋・古川（2000）、村岡・三牧（2000）等による。

5 ネウストブニー（1995b）による「二つ以上の異質の文化が接触する」場面。接触場面においては、母語場面とは異なる様々な特徴が存在する。

すいことから、学習者の情意フィルター⁶を低下させ、習得が起こりやすい状態になる。

- 2) 「ビジター」は教師のような訓練を受けておらず、ティーチャートークを持ち合わせていないことから、「実索性」を持ったインターアクションを行う「本物の場面」を提供できる。
- 3) 「ビジター」は様々な背景を持つ日本社会・文化における一構成員であることから、日本社会・文化の多様性を提示できる。

本コースにおいては、このような「ビジター」の活用により、教室内に「実索性」を持つ接触場面を提供し、実際使用の場面における日本語や、日本社会・文化の多様性を直接体験させながら、インターアクション能力の向上を図ることを目的としている。

3. 「ビジター」を活用したアクティビティ

3.1 募集の経緯

「ビジター」を活用したアクティビティは、現在のコースカリキュラムが設定された1997年より実践されている。2002年度からは、本学文学部に設置されている「日本語教育実習」の担当教員⁷と連携し、その受講生を優先させる募集も行っている。

募集は、主として学内の日本人学生を中心に行っているが、本学以外の一般の日本人参加者や、文学部の「日本語教育実習」受講生によるノンネイティブの「ビジター」も存在する。

また、「ビジター」に活動内容の把握を促し、効果的なアクティビティを実践するため、募集の概要と典型的なアクティビティの内容紹介、及び学習者と話す際の日本語のコントロールについて示した資料を作成した⁸。

6 Krashen, S. D. (1987) による。

7 備前徹助教授による担当科目である。

8 資料1・2を参照のこと。

3.2 アクティビティの内容と「ビジター」の役割

以下に、典型的な5種のアクティビティの内容と「ビジター」の役割について概説する。なお、各アクティビティの名称は、本コースにおいて便宜上使用しているものである。

本コースにおいては、このような枠組みの中で各クラスにおける担当教師が、学習者の日本語レベルやニーズに応じて、随時適切と思われるアクティビティを実践している。「ビジター」の役割は、アクティビティの内容によってそれぞれ異なるが、いずれにおいても「実際使用の場面に近い日本語、及びそれに伴う言語行動を提供する」役割を担う。

1)「会話練習」のパートナー

ロールプレイ等の会話練習を学習者と「ビジター」がペアになって行うものである。学習した日本語を実際に使用する機会を提供することを目的としている。「ビジター」には、教師の指示に従い、学習者の日本語レベルに合わせて、会話練習の相手となることが求められる。

2)「インタビュー」のパートナー

学習者があるテーマを設定し、それについて調査するために質問項目を準備し、「ビジター」に日本語でインタビューを行うものである。学習した日本語を駆使して「ビジター」に質問し、実質的な情報を得ることを目的としている。「ビジター」は、学習者の質問に日本語で答えることが求められる。

3)「意見交換」

あるテーマに関して、学習者と「ビジター」が意見交換や、ディベートを行うものである。学習者が「ビジター」と共に活動を行うことにより、学習した日本語を駆使して自分の意見を伝え、様々な情報や考え方を吸収することを目的としている。「ビジター」は、学習者と対等な立場で意見交換に参加することが求められる。

4) 「発表を聞いて質問」

学習者があるテーマに関して調査活動⁹を行い、その結果を日本語で原稿にまとめ、発表する。それに対して「ビジター」や他の学習者が発表の内容や方法について、質問やコメントをするものである。学習者が自らの発表について質問やコメントを受けることによって、真に意味のあるコミュニケーションの場面を作り出すことができる。これによって、様々な観点からフィードバックを得ることが目的である。

5) 「プレゼンテーション準備補助」

本コースにおいては、初級から上級までのすべての学習者に対して、学習のまとめとして、「プレゼンテーション」を行うタスクを課している。これは、学習者がある視点に基づいてテーマを選び、調査した結果を一般のゲストの前で口頭発表するものである。

「プレゼンテーション」の準備においては、テーマの選択、調査方法の検討、調査の実施、調査結果のまとめ、原稿の執筆、資料の作成、口頭発表の練習という過程を経る。その過程において、教師は学習者に対して個別指導を行っている。個別指導の際には、まず、学習者の考えていることについて日本語で質問を重ねながら、やりとりを行い、十分な時間をかけてその内容を把握する。その後、適切な情報やコメントを提供し、今後の作業の方向性についてアドバイスを与える。

しかし、クラス内の学習者の人数¹⁰によっては、一定の授業時間内に一人の教師がすべての学習者に十分な時間をかけることが難しく、学習作業の進行の停滞を起こすことがある。そこで、本コースにおいては、このような場合に、しばしば「ビジター」を活用し、準備補助を依頼している。準備補助は、個別指導に多大な時間を要する原稿執筆の段階に多い。その際には、「日本語として明らかに正しくない部分や、意味不明瞭な部分を指摘し、日本語のやりとりを通して学習者に内容を確認する」「必要に応じて訂正や情報提供を行う」

9 アンケート調査、インタビュー調査、文献調査等を行う。

10 1クラスの学習者数は12名以下で構成されている。

といった活動を中心に行う。

但し、訂正や情報提供は、学習者の日本語レベルや、これまでの作業の流れによるところが大きい。適切なものを提示するのが難しい場合もある。また、最終的な判断は、教師の指導を受けた後、学習者が行うものである。「ビジター」には事前にこのようなことについて説明し、正しいものを提供するという姿勢ではなく、「一つの選択肢として情報を提供する」という姿勢で活動を行うように指示している。同時に、教師とは異なる「ビジター」の役割と利点について説明し、その意識化を図っている。また、「ビジター」には活動内容を記録することを義務づけ、教師は必ずその内容を具体的に把握するようにしている。

なお、この場合の「ビジター」については、日本語教育に関する知識や、学習者の日本語レベル、既習文型・語彙等についての知識を有している方がより効果的に活動できると判断し、文学部の「日本語教育実習」受講生を優先させている。以下に各段階における「ビジター」の活動内容の例を記す。

<テーマの選択>

- ・学習者が提示したテーマについて、テーマ選択の理由や明らかにしたい事柄について具体的に確認する。

<調査>

- ・アンケート・インタビュー調査の質問項目について、意味のわかりにくい部分を指摘し、日本語のやりとりを通して内容の確認を行い、必要に応じて訂正や情報提供を行う。
- ・アンケート・インタビュー調査の対象者となる。

<原稿執筆>

- ・日本語に関する間違いや、意味不明瞭な部分を指摘し、日本語のやりとりを通して内容の確認を行い、必要に応じて訂正や情報提供を行う。
- ・教師が訂正した部分について、リライトの補助をする。
- ・全体の内容について、疑問点を指摘する。

＜資料作成＞

- ・資料の適切さ、わかりやすさ等についてコメントする。

＜口頭発表の練習＞

- ・キーワードの確認をする。
- ・アクセント・イントネーションについて不自然な箇所を指摘し、適切な形を示す。
- ・モデルリーディングを行う。録音する。

4. 教育的効果と実施上の問題点

2002年度夏期・秋期コースにおいては、計77回のアクティビティが実践され、延べ人数312名の「ビジター」の参加が得られた¹¹。「ビジター」を活用したアクティビティの具体的な効果、及び問題点を把握し、今後の改善を図るため、2002年度夏期・秋期コースにおいて担当教師による反省会を実施した。また、各コース終了時において、担当教師と学習者に記述式のアンケート調査を行った。これらの資料をもとに教育的効果、及び実施上の問題点とその改善策について述べる。

4.1 教育的効果

1) 動機づけの向上

「ビジター」がアクティビティに参加することによって、学習に対する動機づけの向上が観察された。教師とは異なる一般の参加者と接触し、日本語の実際使用の場面が提供されることに対する学習者の期待は大きい。特に「インタビュー」「意見交換」「会話練習」等、学習者が主体的に活動する性質の強いアクティビティにおいて、このような様子がしばしば観察された。

また、「プレゼンテーション準備補助」においては、担当教師から「『ビジター』が来ることで義務感や目標ができ、原稿が早く仕上がる効果もあった（仕上げようとする学習者もいた）」「『ビジター』にチェックしてもらう日を意識

11 詳細は資料3を参照のこと。

して、原稿を書かなければならないという気持ちになってくれた」等というコメントが得られた。学習者からは、「教師だけでなく（教師に見てもらえない時にも）『ビジター』に助けてもらえるから安心する」「同世代の日本人学生と交流が持ててうれしい」というコメントが得られた。

このような動機づけの向上は、自律学習を促進させ、学習効果の向上に貢献するものであり、第二言語習得が行われる上で重要な意味を持つ。また、学習者と「ビジター」のネットワーク作りにも貢献するものであろう。

2) 実際使用の場面における日本語、及び日本社会・文化の多様性の意識化

教師とは違った背景・資質を持つ様々な「ビジター」と接することにより、実際使用の場面における日本語、及び日本社会・文化の多様性を意識化させることができる。

日本語の母語場面におけるインターアクションを観察することにより、表現形式や対人行動のストラテジーのバリエーションに触れることができる。また、教師以外の日本語の音声に触れることにより、音声面におけるバリエーションを経験することもでき、実際使用の場面の日本語に慣れる一助となるであろう。

更に、実際使用の場面における様々な情報を得ることにより、日本社会・文化に対するステレオタイプのイメージを崩し、多様性の意識化が実現できる。特に「インタビュー」や「意見交換」においては、「ビジター」に直接質問したり、質問を受けたりすることにより、学習者自身の思考の枠を広げることができる。

学習者からも、「教師ではない、普通の日本人の意見が聞けてよかった」「生の日本語を聞く機会が持ててうれしい」「本番前の練習として実際に経験していたことが自信につながった」等というコメントが得られた。

このような経験は、実際使用の場面におけるインターアクションを観察する視点を養い、インターアクション能力の習得を促すことが期待できる。

3) 学習の効率化と自己の客観化

「ビジター」の参加を得ることで、学習の効率化や、学習者自身のインターアクションの客観化を促すことができる。本コースでは、特に「会話練習」「プレゼンテーション準備補助」において、それらが著しく得られた。以下に具体的に述べる。

①「会話練習」

「ビジター」が学習者の会話練習のパートナーとなることによって、教師は学習者が実際にどのようなインターアクションを行うのかを教室の中で観察することができ、その様子について、すぐに学習者へフィードバックすることができる。また、学習者は「ビジター」がインターアクションの中で気がついたことや、実際使用の場面における様々な情報を教師の指導のもとで得ることができる。このような経験により、学習者は日本語や日本社会・文化に関する多様性を意識化することができ、自らのインターアクションを客観的に捉える機会を得ることができる¹²。

②「プレゼンテーション準備補助」

教師が一人の学習者を指導している間に、他の学習者は「ビジター」から学習作業の補助が得られる。これによって学習の効率化を図ることができる。

また、「ビジター」から、疑問点や意味不明瞭な部分を指摘されることによって、自らの作業過程を客観的に捉え直す機会が与えられる。更に、そこで実際に日本語を使用して「ビジター」に説明する必要性が生じることで、真に意味のあるコミュニケーションの場面を得ることができる。

このようなことは、教師によっても当然行われるが、教師は学習者の背景や日本語レベルを熟知しているため、しばしば、学習者の伝えたいことを必要以上に察したり、手助けしたりすることがある。また、学習者が日本語で説明する以前に、その意図をより簡単に汲み取って理解してしまう傾向がある。

しかし、「ビジター」による疑問点や意味不明瞭な部分の指摘は、自らの日本語やインターアクションがどのように受け取られるのかという点について、

12 末田 (2003) による。

あらためて考えさせるきっかけとなる。このような経験は、学習者に内省の機会を与え、自己の客観化につながるものである。

4.2 実施上の問題点

1) 「ビジター」の背景・資質

「ビジター」の背景は様々である。それは、日本社会・文化の多様性の意識化につながる。また、教師と異なる「ビジター」の性質がアクティビティの中で活かされるという利点もある。

しかし、一方で、応募の得られた「ビジター」がアクティビティの内容と合っているか、教師の意図に沿った効果的な活動が可能かという不安は常に伴い、事前の授業計画の際に予想のできない事柄も発生する。

例えば、「会話練習」や「プレゼンテーション準備補助」のモデルリーディングの場合には、アクセント・イントネーションやポーズが意識された話し方が望ましいと思われるが、必ずしもそのような「ビジター」が得られるとは限らない。「意見交換」の場合には、事前にテーマを提示しているが、テーマに関する背景や知識を十分に持ち合わせていないことから、あまり積極的に参加できない「ビジター」も存在する。各アクティビティにおいて、教師は事前はその目的と手順を説明しているが、教師の意図を汲み取り、主体的な参加が得られる場合もあれば、そうでない場合もある。これらのことは、「ビジター」の経験の数にも起因するであろう。また、遅刻・欠席も少なくなく、アクティビティの進行を妨げる場合もある。

このような「ビジター」の個人差は、特に学習者とペアを組んで活動する場合に問題になり得る。学習者が不公平な印象を抱く可能性もあろう。

本コースでは、定期的な参加を希望する「ビジター」の登録を行っており、名前や所属、興味のある事柄、アクティビティに参加した感想等についての情報を得ている。また、参加したアクティビティの内容と、その様子に関して、担当教師のコメントを記録している。これらの情報によって、2回目以降に参加する「ビジター」については事前に情報を把握することができる。アクティビティの目的や性質によっては、このような情報を活用し、「ビジター」を選

定した募集をする必要もあろう。

2) 「ビジター」の役割と意識

「ビジター」には事前にアクティビティの内容を提示し、当日具体的な説明を行っている。しかし、このような情報をどこまで把握しているか、自らの役割をどのように意識化しているかについては、個人差がある。彼らの背景・資質や、参加経験、参加目的によっても異なるであろう。

例えば、自らの日本語や習慣、考え方が日本社会・文化の典型であるかのように振る舞われ、学習者にステレオタイプの「教え込み」が行われる場合もある。また、「ビジター」は普通、日本語の言語規則に関して無意識の手続き的知識¹³しか所有していないため、言語規則や言語理論の説明は求められていない。しかし、このようなことを行いたいと考える「ビジター」も存在する。一方、活動内容について明確に理解できず、とまどいを感じたり、その役割を教師に代わって「教える」ことだと捉えてしまう「ビジター」も存在する。

このような事柄について、教師は事前に説明や指示を与えているが、それが十分に機能しないこともある。このような事実についても真摯に受け止め、より明確に指示内容を提示し、「ビジター」の役割の意識化を図るために努力をするべきであろう。

同時に、学習者に対して、『ビジター』はそれぞれ日本社会・文化の一構成員であるにすぎず、彼らから得た情報のみを信じ、ステレオタイプ化するべきではないこと」「言語規則等について教師のような専門知識を持ち合わせていないこと」を確認するべきであろう。

3) 学習者の心情

「ビジター」の参加により、動機づけの向上や学習の効率化といった利点が得られ、ほとんどの学習者は肯定的な評価をしている。しかし、一部の学習者

13 Anderson, J. R. (1982) による。

からは、「自分はまだ日本語が下手だから教師以外の日本人と話すのは恥ずかしい」「年上の日本人と話すとき緊張する」等というコメントも得られた。このようなことは、実際使用の場面においても学習者が必ず経験することである。教室場面において、これらを克服する経験を持つことは非常に重要な意味を持つ。しかし、このような抵抗感を持つ学習者が存在することにも着目するべきである。

「ビジター」を学習の補助として活用する性質が強いアクティビティにおいては、次のようなことがあった。「プレゼンテーション準備補助」においては、「『ビジター』は助詞やスペルの間違いを直せるけど、それだったら他の人にも頼める」「同世代の日本人に自分の日本語を見てもらうのは恥ずかしい」「一人で準備したい」「年下の『ビジター』に日本語を訂正してほしい」という学習者が存在した。「会話練習」においては、「ロールプレイ等の練習やテーマが決まっている会話は行いたくない」「自由に好きなことを話したい」「授業時間外にも話したい（時間が足りない）」というコメントが得られた。このようなコメントからは、「ビジター」との活動を通して、自らの興味のある事柄について意味のあるコミュニケーションを行いたいという学習者の意識が伺える。また、「ビジター」とのネットワークを作りたいという意識も見受けられる。

当然のことながら、このような学習者の意識は重要なものである。教師はこのようなことから、より効果的な「ビジター」の活用方法とアクティビティの内容について考える必要がある。しかし、同時に、各アクティビティの持つ目的について、学習者に十分に説明し、理解を図る努力もするべきであろう。

一方、「発表を聞いて質問」においては、「たぶん日本人はいつもやさしいですから、いつもほめてくれる。でも、どうやったら上手になれるのかが聞けなかった」というコメントも得られ、「ビジター」が学習者の日本語を過大評価し、彼らの期待する情報やコメントが得られなかったことを訴える学習者も存在した。

以上のことを鑑み、学習者の心情に配慮した上で、教師が学習者と「ビジター」の間のコーディネーターとしての役割を担うためには以下のことを行う必

要があると考ええる。

- ① 教室の中で「ビジター」を活用することの意味や、アクティビティの目的について、学習者に十分に説明し、理解を図ること。
- ② 実際使用の場面においても経験することを事前に教室で経験し、問題を克服する経験を持つことの重要性について説明すること。
- ③ 教師とは異なる「ビジター」の資質や、背景について事前に情報を与えること。

4) 教師の負担

「ビジター」を活用したアクティビティを効果的に実践するためには、学習者に対する指導、説明、指示、及び「ビジター」に対する説明、指示等を充分に行う必要がある。

アクティビティを実施している際には、教師は、学習者と「ビジター」の両者の活動に常に注意を払わなければならない。担当教師からは「『ビジター』への配慮で負担が増えたところもある」「学習者と『ビジター』の両方に指示を出したり、説明をしたりしなければならないので却って負担が増える」等というコメントが得られた。

例えば、「プレゼンテーション準備補助」は確かに学習の効率化につながる。しかし、学習者の人数が多い場合、教師は「ビジター」と学習者の活動を、その場で充分に把握しにくいこともある。このような場合、「ビジター」の残した記録等を活用して対応するが、授業後にフォローアップのための指導を行うこともある。

このようなアクティビティによる教育的効果は大きいが、同時に教師の負担も大きくなることを指摘しておきたい。

5. 今後の課題

本稿では、本コースにおける「ビジター」を活用したアクティビティの教育的効果、及び実施上の問題点とその改善策について考察した。「ビジター」の活用は多くの利点がある。しかしながら、より効果的にアクティビティを行

い、教育的効果を高めるためには課題も残る。今後の課題としては以下のことが挙げられる。

1) 「ビジター」に対する指示内容の明確化と役割の意識化

アクティビティの教育的効果を高めるためには、「ビジター」に対する指示内容をより明確にし、教師とは異なる「ビジター」の役割について十分な説明をする必要がある。同時に、コースカリキュラムの中において、教師間の共通理解を図る必要もあろう。

また、「プレゼンテーション準備補助」のように、学習者の個別学習を補助する性質の強いものについては、事前に学習者の作業進行状況や現在抱えている問題を伝え、情報を把握してもらうといった対処も考えられる。

2) 「ビジター」の期待

教師は、学習者と「ビジター」の間のコーディネーターとしての役割を果たす必要がある。そのためには、学習者のみならず、「ビジター」の目的や期待、アクティビティ参加後の意識、態度変容等についても把握する必要がある。

現実には観察できる「ビジター」の様子からは、そのほとんどが好意的な評価をしているように見受けられるが、その目的や期待は個々の「ビジター」によって異なるであろう。

例えば、文学部の「日本語教育実習」受講生としての「ビジター」は、「教師の補助として役立ちたい」「教えたい」という気持ちが比較的強い傾向にあると感じられることもある。また、一人の参加者としての意識よりも、受講生としての役割を果たさなければならないという意識が強く、緊張した様子が見受けられることもある。

日本語教育の専門分野の知識を積んでいる「ビジター」としては、このような意識が起るのも、当然のことであろう。また、彼らをより効果的に機能させることを目指すならば、ネウストプニー（1995 a）でも指摘されているように、アクティビティを実践する担当教師のもとで、ある程度の専門的な訓練と経験を積む必要がある。本コースにおいては、例えば「プレゼンテーション

準備補助」における「原稿執筆の補助」「モデルリーディング」等がこれに該当する。

3) 接触場面における特徴を活かしたシラバスの作成

コースカリキュラムの中で「ビジター」を継続的に活用できる利点を最大限に活かし、実際使用の場面における学習者のインターアクション能力の向上を図るためには、学習者と「ビジター」の接触場面の特徴を分析し、そこで必要となる事柄のシラバス化が望まれる。

例えば、「自分の日本語レベルを相手に知らせる」といったコミュニケーション・ストラテジーや、フォリナー・トークに関する情報について、学習項目として取り上げる必要があると考える。また、自分自身の日本語を使ったインターアクションを客観的に認識させるための指導や、内省の機会の提供も重要である。これらの事柄を活かしたシラバスの作成を実現させ、コースカリキュラムの中に組み入れていくべきであろう。

4) 長期的なプロジェクトの実現

現在行われているアクティビティは、そのほとんどが単発的なものであるが、長期的な計画に基づいたプロジェクトを継続的に行うことによって、新たな教育効果が期待できる。

例えば、学習者独自の課題を設定し、「ビジター」との共同タスクの実践の可能性も考えられる。このような活動は、インターアクション能力の育成、向上につながるだけでなく、学習者の自律学習を促す上で有効だと思われる。また、先行研究においても報告されているように、学習者と「ビジター」との相互交流、異文化理解の側面においても有効であろう。双方にとって大きな収穫となることが期待できる。

5) ノンネイティブ「ビジター」の活用

本コースでは、文学部の「日本語教育実習」受講生によるノンネイティブの「ビジター」が存在する。

ノンネイティブの「ビジター」はネイティブの「ビジター」と異なる性質を持っている。日本語の正確さや母語話者としての直観という面では、ネイティブと異なる場合もあると思われるが、日本語を第二言語として習得した経験や、ノンネイティブの視点で捉えた日本社会・文化に関する情報の提供、経験談の披露等、その特性を活かした活用ができる。

本コースでは、上級レベルの「意見交換」「会話練習」において活用した例がある。「意見交換」では、日本での「ごみ問題」が話し合われた。ノンネイティブの「ビジター」からは、ごみの出し方や近所づきあいに関して、日本人の習慣や考え方を理解した経緯が述べられ、学習者へのアドバイスが行われた。「会話練習」では、同国籍の学習者の発音矯正について、具体的なアドバイスが得られた。

担当教師からは、「学習者はノンネイティブの『ビジター』に対して親近感を持っていた」「学習者は彼らの使用する日本語についてモニターしている様子が見受けられた」「日本語の正確さについてはさほど問題にならなかった」との報告があった。

このような評価は、学習者の日本語の習得状況やアクティビティの性質によっても異なると思われる。また、「ビジター」として参加した彼らの意識についても把握する必要がある。今後はこのような事柄も視野に入れ、ノンネイティブ「ビジター」の新たな活用方法についても考案したい。

以上のような課題を検討し、より効果的なアクティビティの実践に向けて、学習者と「ビジター」の接触場面におけるコーディネーターとしての役割を果たすべく改善を図りたい。

<付記>

本コースにおける「ビジター」を活用したアクティビティの名称の考案、及び資料1・2については、梅田エリカ・白井香織（専修大学国際交流センター日本語・日本事情プログラム非常勤日本語インストラクター）、及び佐々木薫（専修大学国際交流センター日本語・日本事情プログラムチーフコーディネー

ター)の協力を得て作成したものである。

<参考文献>

- 浅岡高子 (1987)「オーストラリアのハイスクールにおける Japanese Language Assistant についてービクトリア州の場合ー」『日本語教育』62日本語教育学会
- 末田美香子 (2003)「日本人参加者を活用した会話授業ー『日本人参加セッション』の試みー」『専修国文』73専修大学日本語日本文学会
- スクータリデス, A (1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45日本語教育学会
- 高偉健・長坂水晶 (2000)「アシスタントを導入したプロジェクトワークータイ中等学校日本語教師研修での実践ー」『日本語国際センター紀要』10国際交流基金日本語国際センター
- 高橋三千代・古川嘉子 (2000)「ビジターセッションにおけるロールプレイの効果ー1998年度海外日本語教師長期研修『聴解口頭表現』における実践ー」『日本語国際センター紀要』10国際交流基金日本語国際センター
- トムソン木下千尋・舩見蘇弘美 (1999)「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者ーその問題点と教師の役割ー」『世界の日本語教育』9国際交流基金日本語国際センター
- ネウストプニー, J. V. (1981)「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45日本語教育学会
- ー (1991)「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』1国際交流基金日本語国際センター
- ー (1995a)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ー (1995b)「外国人とのコミュニケーションー外国人問題はこれからどうなるかー」『新「ことば」シリーズ1ー国際化と日本語ー』文化庁
- ー (2002)「インターアクションと日本語教育ー今何が求められているかー」『日本語教育』112日本語教育学会
- 八田直美・山口薫 (1993)「日本語教育における日本人アシスタント導入の意

義と可能性—91年冬期の実践をもとに—」『日本語国際センター紀要』3
国際交流基金日本語国際センター

バルダン田中幸子他（1988）『コミュニケーション重視の学習活動—プロジェクトワーク、シミュレーション、ロールプレイ—』凡人社

舩見蘇弘美（1997）「日本人との接触場面のためのインターアクション能力の開発—海外（オーストラリア）学習者の日本人家庭訪問を通して—」『平成9年度日本語教育春季大会予稿集』日本語教育学会

溝口博幸（1995）「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育—『日本人家庭訪問』の場合—」『日本語教育』87日本語教育学会

村岡貴子・中山亜紀子（2000）「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP の日本語クラスにおけるビジターセッション—1999年春学期の実践報告—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』4大阪大学留学生センター

村岡貴子・三牧陽子（2000）「大阪大学豊中キャンパスにおける『日本語パートナー』の特性と活動—1999年第1学期の実践報告および考察—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』4大阪大学留学生センター

Gehertz 三隅友子・上田和子（2002）「双方向学習の試み—交流セッションから見えるもの—」『日本語国際センター紀要』12国際交流基金日本語国際センター

Anderson, J. R. (1982) *Acquisition of Cognitive Skills*. Psychological Review 89

Krashen, S. D. (1987) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Prentice-Hall International

資料 1

日本語クラスビジター募集！

留学生と一緒に楽しく日本語のクラス活動に参加してみませんか？

クラスビジターって なに？

留学生の日本語の勉強のお手伝い！



国際交流センター日本語日本事情プログラムでは、初級から上級まで、様々な国からの留学生が日本語を勉強しています。クラスでは、日本語の勉強のお手伝いをしてくれる方を随時募集しています。専門、語学経験などは問いません。日本語を使って、主体的に活動に参加してくれる方、本学の学生だけでなく一般の方の参加も 歓迎いたします。活動を通して 留学生との生のコミュニケーションを楽しみましょう！留学生も みなさんを楽しみに待っています！

どんなことを するの？

留学生の発表を聞いて質問！

会話練習！

ディスカッション！



日本のこと、みなさんの生活について話したり、留学生の発表を聞いたり、会話練習の相手をしたり、ディスカッションをしたり…と内容は様々です。留学生との活動を通して 世界の様々なことを学び吸収する貴重なチャンス！ お友達も作れますよ。是非 色々なクラスの活動に参加してください。

日本語で
だいじょうぶ？

大丈夫。心配いりません！

基本的には 日本語だけで 話してください。日本語はコミュニケーションの道具です！ どんなふうにすれば伝わるか 挑戦してみてください。

～クラスのレベル～

初級：J1 （あいさつ、自己紹介などの簡単なことが話せる）
中級：J2・3（旅行の経験など身近なことについて話せる）
上級：J4・5（仕事・ジェンダーなど社会的な話題について話せる）

参加申し込みは
どうするの？

募集シートを見て
申し込んでね。

国際研修館または国際交流事務課（9号館5階）窓口にある「クラスビジター募集シート」で 日程・活動内容を確認の上、お申し込みください。なお、やむを得ない事情で遅刻・欠席をする場合は必ずご連絡ください。連絡・お問い合わせは 国際研修館（TEL:044-911-2046） まで。

<http://www.acc.senshu-u.ac.jp:8081/kokusai/index-sj.shtml>

留学生と一緒に様々な方の参加をお待ちしております！

こんな時には・・・

みなさんが話した日本語が 留学生に伝わらない時には、まず ゆっくり・はっきり 言ったり、身振り手振りをまじえたりしてみてください。

それでも 難しい時には、次のようなことを試してみてください。

やさしい言葉で！

例えば…

職業 → 仕事

きっかけ→どうして始めましたか

通勤する時 → 会社に行く時

食べたことがあります→前に食べました

例を挙げて！

例えば…

家族 → お父さん・お母さん・お姉さん・弟…

交通機関 → 電車・バス・タクシー …

挨拶する → 「こんにちは」と言います

いつごろまで日本にいますか → いつごろまで 日本にいますか。

10月ですか。11月ですか。

短い文で！

例えば…

お金がなければ 旅行に行けません。

→ お金がありません。旅行に行けません。

これは 中国に行った友達からもらったお茶です。

→ これは 中国のお茶です。友達からもらいました。友達は 中国に行きました。

😊 参加したビジターの声・・・

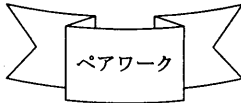


- ・とても楽しかったです！
- ・みんなが思ったより日本語が話せるのでびっくりしました！
- ・色々な国のことが わかって おもしろかったです。
- ・様々な観点からの考えが聞けて勉強になりました。
- ・自分の日本語を意識するいいチャンスになりました。

資料2

日本語クラスビジャー

～活動内容の紹介～



ペアワーク

～留学生の学習活動のパートナーになろう！～

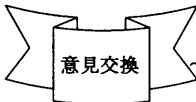


☆ 会話練習

- ・会話練習のパートナーになってください。
- ・決まったフォームでの練習や場面や状況に応じた練習をします。

☆ インタビュー

- ・留学生が作ったインタビューの質問に答えてください。
- ・テーマは、アルバイト、食生活、結婚観など様々です。

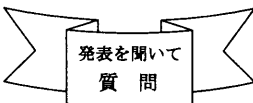


意見交換

～留学生と一緒にディスカッションやディベートをしよう！～

◇留学生と

みなさんは… あるテーマについて ディスカッションやディベートをします。
新聞、雑誌、ビデオなどの情報を基に行うこともあります。



発表を聞いて
質問

～留学生って どんなことを考えているのかな？～



◇留学生は…

あるテーマについて勉強した後、インタビューやアンケート、
文献調査などを行います。
その結果をまとめて みなさんの前で発表します。

◇みなさんは…

留学生の発表を聞いて、内容に関する質問・コメントしてください。
また、発表の仕方について、聞き手として気がついたことがあれば
コメントしてください。

資料3

2002年度 夏期・秋期コース「日本語クラスビジター」を活用したアクティビティの実施結果
 2002年度 夏期コース

1) 活動内容別回数と参加人数

アクティビティの種類	実施回数	参 加 人 数	
		「実習生」	「一般」
会話練習	11	38	27
インタビュアー	2	10	0
意見交換	4	0	13
発表を聞いて質問	7	0	23
プレゼンテーション準備補助	7	8	7
その他(聴解)	1	0	3
合計	32	56	73
			129

2) クラスレベル別実施回数

レベル	クラス	実施回数
上級	J4	6
中級	J3	4
	J2	11
初級	J1C	6
	J1B	5
合計		32

3)「日本語クラスビジター」の選刻・無断欠席

	回 数	
	「実習生」	「一般」
選刻	0	0
無断欠席	0	3
合計	0	3

※「実習生」: 文学部「日本語教育実習」受講生
 「一般」: 上記以外

1) 活動内容別回数と参加人数

アクティビティの種類	実施回数	参 加 人 数	
		「実習生」	「一般」
会話練習	9	28	16
インタビュアー	4	12	9
意見交換	5	7	13
発表を聞いて質問	9	9	19
プレゼンテーション準備補助	18	61	9
合計	45	117	66
			183

2) クラスレベル別実施回数

レベル	クラス	実施回数
上級	J4	3
中級	J3	18
	J2	7
初級	J1C	8
	J1B	6
	J1A	3
合計		45

3)「日本語クラスビジター」の選刻・無断欠席

	回 数	
	「実習生」	「一般」
選刻	2	6
無断欠席	6	3
その他	0	1
合計	8	10
		18

※その他: 申し込みを行わずに参加